©海事プレス社2026 禁無断転載

Daily Cargo

26年度国際貨物量予測209万トン

■成田空港、発着回数含め横ばいの水準

成田国際空港会社（NAA）は2026年度の国際航空貨物取扱量の見通しを25年度比1.2%増の209万トンとしている。航空機発着回数は0.3%増の25.5万回で、内訳は国際線が微増の20.6万回、国内線が1.8%増の4.9万回と予測した。藤井直樹社長は5月28日の会見で、発着回数に関しては中国路線が減少している一方で、中東路線が回復基調にあるといった現状を説明。こうした要素を踏まえつつ「国際情勢そのものの予測は難しいものがあるが、発着回数が伸びているエリアがあることを踏まえ、26年度の航空機発着回数は（25年度と）おおむね横ばいの水準で推移すると見ている」と述べた。

藤井直樹社長

26年度の航空機発着回数は、国際貨物便の堅調な伸び、国内線の増便を想定している。併せて国際線旅客便における底堅いインバウンド需要が継続すると予測。国際情勢や経済動向の先行きに不透明感はあるが、貨物量や旅客数、発着回数それぞれ、ほぼ25年度並みの水準で推移すると見通した。

滑走路延伸・新設といった「さらなる機能強化」に関する本格着工から1年を迎える中で、物価高騰を背景に、工事費は当初見積もりから上げざるを得ない状況になっていることに言及。用地確保に関しては、4月に金子恭之国土交通相を訪問し、任意取得に向けて地権者と引き続き丁寧に話し合うこと、任意取得以外の最終的な方法として土地収用制度の活用も検討することになる点を報告したと説明。そのうえで「地権者の理解を得るために、しっかりと交渉を続けていく」と述べた。

成田空港のさらなる機能強化におけるB滑走路の延伸（2500メートルの3500メートル化）は29年度内の供用開始を予定している。C滑走路に関しては、用地確保の観点から供用開始時期は現時点で見通せない状況となっている。当初はいずれも29年3月末の供用開始を予定していた。

さらなる機能強化を踏まえて検討が進められている新貨物地区に関しては、27年夏にマスタープランを策定するスケジュールに変更はない。藤井社長は、公募によってマスタープラン策定事業者が選定されたほか、1月に設立した成田空港新貨物地区検討協議会での関係事業者の意見・検討も踏まえて、新貨物地区の計画を策定していく方針に改めて言及した。